魔法少女リリカルなのは～全てを穿つ凡才の拳～

山の子歳々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは～全てを穿つ凡才の拳～

【Ｎコード】
Ｎ５４２５Ｚ

【作者名】
山の子歳々

【あらすじ】
一人の凡才武道家は壮絶な努力の末『拳聖』の称号をほしいままにし、病によって呆気なくこの世を去った。
しかし未練も何も無く逝った筈なのに、気が付けば何故か再びこの世に『生』を受けていて……

プロローグ

あるところに一人の男がいた。
幼い頃から勉学、運動、教養、全てが凡百な取り得のない男だ。
街中で視線を回せば一人は同じ様なのが見つかるであろう、何処にでもいるような平凡な男。
大抵の人は彼をそう認識するし、事実その認識は彼のある一つの能力を除けば間違っていない。

そんな凡人たる彼には、自分には持ち得ないモノを持った幼馴染が二人いた。
一人は、何事もある程度教われば大抵なんとかしてしまう、とても器用な秀才。
もう一人は、教わらなくても自分の感覚と閃きで全てなんとかしてしまう、誰もが羨むような天才。
男とは真逆の存在である二人。
そんな二人と男は親友同士だった。
本来なら仲良くするどころか御近づきになることさえ困難であろう二人と、何の因果か家が近く、しかも家族ぐるみの付き合いがある二人と男が仲良くなるのは、ある意味当然のことと言えよう。
二人はいつも人々の中心におり、自分達よりも遥かに能力の劣る男にも、分け隔てなく接してくれる人格者であった。
男はそんな二人に憧れていた。
自分が持ち得ぬモノを持つ二人に。自分より遥かに強く聡明な二人に。
それと同時に、激しく嫉妬もしていた。
何故自分にはあのような輝かしい才能(モノ)が無いのかと。
何故あの二人が簡単にできることを俺はどれだけ努力してもできないのかと。自分を友達として良くしてくれる二人に対し、あまりに

も酷く醜い感情だということは男も分かっている。
だが、そう簡単に割り切れる程男は器用ではなかった。故に男は憧れと親愛と嫉妬の狭間に揺れ動き、複雑な心境のまま日々を過ごす。

そんな男に、ある日分岐点が訪れる。
二人は武道を始めるらしく、一緒にどうだと誘ってきたのだ。
コレはチャンスだと男は思った。
格闘技はセンス云々が無くても戦略次第で勝てる可能性は充分あるし、加えて運動神経はともかく純粋な身体能力を鍛えれば、二人の隣に並べるかもしれない。
それに才能がない分、己には根性などの精神力はあるつもりだ。
ある漫画で、『例え試合で負けても、負けた者の心が折れなければそれは真の敗北ではない』と書いてあった。ならば、自分も例え負けても負けを認めず立ち上がり立ち続ければ、可能性はあるということだ。
男は一念発起し、自分も武道を始める決意をする。
あまりにも淡く、儚い希望を抱いて。

しかし神は残酷で、持つ者と持たざる者の差を明確に分ける。
武道を始めてから暫くの月日が経ち、三人が武道というモノに馴染んできた頃だった。
男を差し置いてグングンと頭角を見せる二人。
多くの教わった技を忠実に物にし、手堅く堅実に力を付ける秀才。
教わった技を独自にアレンジし、全く新しい武を極め始める天才。
対して男は、漸く基礎が出来始めたぐらいで、二人はおろか並以下の習得速度の凡才。
全く同じタイミングで武道を始めたはずなのに、あるのは如何ともし難い実力の開きのみ。
身体能力は流石に鍛えれば伸びはしたが、幾らエンジンが良かろうと機体やパイロットが駄目なら何の意味も為さないように、凡才は

幾度も二人に挑むも回数を重ねる毎に力の差は広がり続けた。
天才と秀才の壁はあまりにも高く、本気で打ち込んでいる分、頂が見えない位高く感じられる。
浅はかであった。技術の差がこれほどまでにあるとは思わなかった。
それでも、男は見えぬ頂を目指しながら挑み続けた。
どんどん遠くなる背中を眺めるだけなのは、もう嫌だったから。

それから更に時が経ち、男の敗北数が三桁を超えた辺りだろうか。
男はあの二人と同じやり方では駄目だと悟る。
元々スペックもポテンシャルもまるで違うのだ。二人は基礎どころか応用の応用まで鍛錬が進んでいるのに、まだ基礎を漸く修めた程度でしかないの男が、同じ内容の鍛錬を例え数倍の量をしたとしても、全く身に付かないのは当然のことであろう。土台の出来からして違うのだから。
故に男は、別のやり方を模索する。
二人に追いつくための何かを。

……いや、その何かは男の手の中に既に存在していた。
それは、まるで無い才能の代わりに渡されたかのような、ある特異体質。
過去、男がまだまだ幼い頃に死にかけたことによって得た、ある種の能力。
才能でどうこうできる領域を超えたその力を使えば、男は二人と肩を並べる為の道を大幅に近道することができただろう。
だが、男はその能力を鍛錬以外で使う気は無かった。
純粋な力で二人と勝負したかった。
純粋な力で二人と肩を並べたかった。
だから男は、勝負事にその力を使わないことにしたのだ。

しかしそうなると、男には才能に勝るような武器が何一つない。

男は考えた。
ない頭を捻り捻って必死に考えた。
勝つ為の術を、己だけの武器を。
何度も倒され、何度も地の感触を与えられながら、考え続けた。
そして、一つを極める天才や多くを修める秀才にもなれない凡才は、
答えを導き出す。
在る意味当然で、在る意味潔く、在る意味愚かなその答え。
それは、ただ愚直に一つの技のみを鍛え上げることだった。
一点特化の更に一点特化。
近付いて殴るというだけの基本中の基本にして技ともいえぬたった
一つの技を、ただただ愚直にひたすらに磨く。
究極の一の創作。
それが、男の出した答えだった。

男は答えが出ると早速、それの実現の為に今までしてきた鍛錬を全
て放棄し、独自に練習メニューを調査、研究。
そして拳をより強く、より速く、より鋭く、より重く突くことに特
化した体作り……否、正しく肉体改造を開始。
同時に、効率良く相手を粉砕する為のフォームを模索。
失敗を重ねて重ねて重ねて、偶に成功してまた失敗しての繰り返し。
幾千、幾万、幾億と気の遠くなるほど拳を振るい続け、気付けば５
年の月日が経ち、男の拳はボクシングの世界チャンプのジャブより
も速く、そしてフィニッシュブローよりも強くなった。

この一撃があれば勝てる可能性も充分にある。
男はずっと持ち得ることのなかった自信を得て、秀才に挑んだ。
しかし、そんな浅はかな考えは、秀才の技術の前に敗れる。
男は秀才の射程に入る前に、拳よりも射程の長い蹴りを入れられ男
は敗北を帰す。
甘く見るな、と言外で言われたかのような、手痛い惨敗。

しかし、男は挫けない。
その頃には男にとって失敗などして当然のモノになってあり、最早親しみ深い友のようなものになっていたのだ。
一度や二度の失敗如きで折れるような繊細な性根をしている訳が無い。
男は失敗を反省し、更に１０年の月日を血反吐を吐くような鍛錬と無駄を省く研究に費やした。
何度何度も失敗を繰り返し、その度に修正を加えまた失敗し、数えることが馬鹿らしくなるぐらい失敗と修正を繰り返した。
その結果、男の相手の懐に潜り込む瞬間的動きは、陸上短距離走の金メダリストのスタートダッシュよりも速く、鋭くなった。

得た武器は最強と最速。

これで勝ってみせる。
男は勝利をするための材料は揃ったと、意気込んで天才に挑戦した。
だが、天才は凡才の自信も淡い希望もその努力も、神から授かった圧倒的才能により文字通り打ち砕く。
懐に潜り込んだはいいものの、最強の拳を放つ為に生まれた溜めの瞬間。
コンマ数秒の僅かな隙。
そこを天才は的確に狙い撃ち、男は無残にも散った。
しかも、最速の動きの最中にカウンターを決められた為、衝撃は全て男に跳ね返り、男は生死を彷徨う程の重傷を負う。

何とか命は助かったものの、男は入院することにより筋肉は衰え、抗えぬブランクが生まれた。
天才なら、ブランクぐらいすぐ埋められるだろう。
秀才なら、ブランクをモノともしないような新たな技術を身に付け

るだろう。
だが悲しいかな。男は凡才だった。
たった一日のブランクを取り戻す為にも、凡才たる男は3日以上の鍛錬をしなければならない。
不幸中の幸いにも後遺症は残らなかったものの、怪我は致命傷故に完治するまでに数ヶ月の時を要し、リハビリや衰えた筋肉を取り戻すことも考えると更なる時を必要とした。加え、鈍った感覚を取り戻すともなると最早再起は絶望的だろう。
男を昔から知る人物達は、誰もが男に言った。

――もう止めろ。

――やっぱり才能には勝てない。

――お前はよく頑張った。

――お前ももう限界だろう。

――これ以上は命が幾つかあっても足りない。

男の様を見れば、男を止めようと思うのは当然のことで、事実男も『やはり俺には無理なのか』と心が廃れ折れそうになる。
だが、男は諦めなかった。
否、最早諦めることすら不可能な段階にまで陥っていた。
これまでの生涯を才ある好敵手と肩を並べるために費やしてきた男にとって、二人と肩を並べる願いは、いずれ最強の二文字を渇望するまでに強く熱く変質し、二人を目指す道程は憧れを超え、生き甲斐を超越し、男の人生そのもの、使命と思えるまでに昇華されていたのだ。

その考えにまで至ると、男の行動は早かった。

リハビリ期間を能力を使用して強引に短縮させ、１から体の造り直し。

文字通り努力の結晶たる最強と最速を取り戻す為、嘗ての経験を活かしてより効率的に技を磨き、天才との敗因を考えて更なる試行錯誤を繰り返す。

これまでと同じ様に……否、これまで以上の失敗と修正を繰り返し、男はただひたすらに鍛錬に打ち込む。

目標を成就させるために。

そして、怪我をしてから１５年の月日が経ち、遂に男は完成させる。

天才の圧倒的センスも秀才の万能性をも打ち砕く、至高の一撃を。

男は好敵手達に再三勝負を申し込んだ。

二人はそれを当然のように受理する。

この時男達の年齢は４０後半と全盛期を既に過ぎているかのように思われた。

しかし二人は男に試練を与えるかのように、秀才は更に技を増やしどんな敵とも戦えるよう万能性を磨き上げ、天才は最強と呼ばれるほど更なる高みへと上り詰めていた。

初めて挑戦してから相当な年月が経っているというのに、衰えることなく寧ろ達人と謳われるまでに武を錬磨した好敵手達に。こんな自分の挑戦を鬱陶しがらずに全力で受けてくれた幼馴染達に。

男は尊敬と感謝の念を胸に秘めながら拳を振るう。

最強の拳と最速の瞬間速度、そして新たに得た０と等しい程にまで削られた最小の隙。

総じて、彼が長い月日を掛けて磨き上げた最高の技は、見事、好敵手達を地に沈めた。

ただ一つのみを磨き上げた凡才の３０年にも及ぶ努力は、天才も秀才も一撃で沈める程に至り、男は３０年越しの念願を遂に叶えたのだ。

それから男は最強の称号をほしいままにし、数多の挑戦を受けるが負けることはなく、『拳聖』と謳われるまでに世界中にその名を轟かせる。
目標を達成した男は、何時しか好敵手達と共に武の極みを目指すようになり、切磋琢磨し合いながら、若かりし頃から変わらぬ愚直さで鍛錬と戦闘を繰り返した。
夢にもまで見た、二人と肩を並べるながら。

それは初めてと思えるぐらいに充実し、輝ける日々。

しかし、どのような事にも必ず終わりが訪れる。
男は長年の無理が祟り、病に罹った。
命にも関わる病だ。
当然、男の周りの人々は彼に引退するよう言い、治療に専念することを勧めた。
しかし、男は引退することは無くたった一つの武を練磨し続けた。
やっと念願を叶えられ、二人と肩を並べ遙か遠き頂を目指して歩んでいるのだ。
そんな幸せな時をどうして自ら止められようか。
幼馴染にして好敵手の二人も、彼を止めなかった。
男の努力とその成果を身を持って知っている二人に、彼の人生そのものを奪うことなど出来るはずも無かったのだ。
そんな二人に男は感謝し、周りの声を黙殺して更なる高みを目指し続けた。
己の命を削りながらも、ブレる事無く真っ直ぐに。

そしてその数年後。
一人の凡人の長い武道の生涯は、誰にも看取られる事無く静かに幕を閉じた。
男は死ぬ直前まで挑戦者からの挑戦を受け、生涯現役を貫いたという……

一人の凡才が紡ぎ、見事完結した物語。
当初は小さく淡かった『願い』は、徐々に形を成して大きな『生』そのものにまで昇華された。
最後の最後まで己の道を貫き通した男の死に顔は、眠っているかのように安らかだったとか……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5425z/

魔法少女リリカルなのは～全てを穿つ凡才の拳～

2011年12月18日09時51分発行